巻頭言　　文化と生業 － 伝統芸能の継承から考える

福田　　淳（広島県林業振興部長）

私は、伝統芸能「木場(きば)の角乗(かくのり)」の継承に関わり始めて、19年になる。「木場の角乗」は、水に浮かんだ幅30cm、長さ５ｍほどの角材の上で、バランスをとりながら、各種の技を披露する芸である。角乗は、江戸・東京の木材産業の中心地であった「木場」（東京都江東区）で、水上での木材の輸送・流通に携わってきた職人集団「川並(かわなみ)」の腕自慢・余技として発達してきた。

木場は、徳川家康が、江戸城築城に当たり、遠江や三河などから材木商を呼び寄せたことに始まる。木場では、掘割に沿って木材業者が集中し、各地から船で運ばれた木材が集積され、掘割を通じて、水上での取引・輸送が行われた。そこで、水上での木材の仕分け、輸送、保管、検量などを一元的に担っていたのが「川並」である。川並は、河川管理や治安維持にも携わっていたと言われ、単なる下働きではない独立性と高い誇りを持っていた。

木場では、明治以降、鉄道網の発達、輸入材の増加に伴い、木材の取扱量が急激に伸びていったが、昭和30年代以降、地盤沈下や騒音・粉塵などによる環境悪化が問題となった。このため、沿岸部に大規模な「新木場」が造成され、昭和49年から加工業者の移転が始まった。

しかし、それと並行して、木材の輸入形態が丸太から製品へと移行していったことから、皮肉なことに、移転直後から、木材の取扱量が減少し始め、木場の木材産業は急速に衰退していった。今では、新木場の水面には、一本の木材も浮いておらず、川並の仕事も消滅してしまった。

このような中、「東京木場角乗保存会」では、「木場の角乗」の技を次代に伝えるべく、毎週日曜日に稽古を重ね、毎年10月の「江東区民まつり」で披露を行っている。保存会では、これまで、元川並たちの指導を仰ぎながら稽古に励んできたが、今では、元川並は二名にまで減っている。

技の習得に当たっては、角材に乗って練習に励むしかないが、この「文化」としての技は、あくまで、「生業」としての技の上に成り立っている。「文化」としての技は、角材を回したり、その上で逆立ちをしたり、下駄を履いて乗ったりすることである。しかし、それを可能とするためには、保管のために角材をロープで束ねて筏を組んだり、「長鉤(ながかぎ)」と呼ばれる鳶口を自ら加工したり、曲がった竹竿を加熱して真直ぐにしたり、といった、かつては仕事の中で当然のように行われてきたことを行わなければならない。

元川並は、このような作業を当たり前のように行うが、私のように（他の会員も同様）、水上で木材を扱う仕事に携わったことのない者にとっては、「文化」として

の技よりも、「生業」としての技の習得の方が一層難しい。（簡単に回転してしまう角材を平面に保ちながら、数本の角材を束ねることほど難しいことはない。）

「文化」としての技は、あくまで、「生業」という大きな氷山の上に浮き出た一角のようなものであり、「生業」としての膨大な技術的蓄積があってこそ可能となることを、身を以て感じている。

今、「生業」としての技術は急速に消えつつある。「生業」がなくなった後に、「文化」だけを残してくことは可能なのか？そして、その意味は何なのか？

私としては、消滅した「生業」を後世に伝えるために、その名残の「文化」を伝える、というだけでなく、もう一歩踏み込んで、「生業」に携わってきた職人たちの誇り（プライド）を伝えていくことが、地域に住む人々に誇りを培うことにつながるのだと考えたい。

例えば、水に浮いた角材に乗るためには、普段とは全く違う体の使い方（バランス感覚）を習得することが要求される。かつての川並達も、このような体の使い方をしていたのかと思うと、自分が、体の使い方を通じて、職人の歴史の一部になったように、誇らしく感じられる。そのような誇りが、地域に住み続ける意味を与えてくれるのだと思う。

今、人口減少社会を迎える中、山村でも、かつての「文化」を保存する活動が展開されている。その際には、表面に現れる「文化」のみならず、その下に隠された「生業」と、それを担ってきた人々の歴史にも思いを馳せたい。

（以上）